

## 主の誕生ビフォー・アフター

「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。」創 3:15

これは、主の到来に関する、最初の預言です。(天界の秘義 250)

おまえと呼ばれているのは蛇のことであり、蛇とは悪一般、特に自己愛を、女は教会を意味します。蛇の子孫とは無信仰を、女の子孫とは、主への信仰を意味します。そして無信仰と、主への信仰は対立します。女の子孫である「彼」は、主を意味します。主は悪の頭を踏み砕き、服従させますが、逆に悪は、「彼」のかかと、主の自然的なものにかみつき、傷つけます。主が悪を服従させる代償に、主の肉体的な生命は損なわれるという預言、これが、ごく初期のころからされていました。すなわち、主は墮落した人類を救うためには、ご自身の生命を懸けてこの世に生まれなくてはならないことを、最初から予見され、覚悟されておられたのです。

この預言が行われた教会は、最古代教会といわれており、この教会に属した人たちは、私たちと心の構造が根本的に異なっています。心は素直で、偽りが入る余地は全くありません。鋭い直感力で善悪を知り、この世を去ると、そのまま天使になれるような人たちでした。最古代教会の最盛期の人達は、私たちが決して持つことのない素晴らしい直感力によって、主や天使と語り、夢や幻によって教えられていました(天界の秘義 125 参照)。当時の人間と主との交流は、この直感力によって直接行われたのですが、彼らは、「夢や幻として」目の前に現れた主を、人間としてしか意識できませんでした。そのため、主と結びつくことが可能でした。

しかし、主に導かれるよりも、自我(プロプリウム)に導かれることを選び、自分自身の力に頼るようになるにつれ、自分の声に耳を傾け、次第に主の声が届かなくなってゆきます。自分の声とは、悪霊や地獄からの声に他なりません。主と人間の交流が次第に希薄になり、そして失われてゆきます。主との交流が途絶えた人間は、危険な方向に歩み出し、主が止めようとしても人間には聞こえません。自分の力に酔った人間は、主の制止を振り払って、絶滅の道に突き進んでゆきます。

最古代教会の直感力が失われたあと、主と人間たちとの交流は、別のもの、象徴・シンボルを介して行われます。直接的な交流が失われたため、間接的なものを介して人と結びつこうとされたのです。主が新たに創られた古代教会やヘブル教会と呼ばれるものがそうでした。前者はまだ象徴的なものから仁愛、優しい心に至る道を残していましたが、後者は、愛や知恵、仁愛や信仰という、貴重な天的・霊的な意味をすべて失い、無意味な象徴の集まりとなってしまいます。日本の神道などもこの古代教会の遺産であるかもしれませんが、時々の権力者の欲によって、その深い意味は失われます。

そして主のご誕生です。主の生誕の前と後、そのビフォー・アフター。何がどう変化したか、これを知らなければ、その意味がわからず、本当のクリスマスの祝い、喜びと感謝も形式だけとなってしまいます。救世主がお生まれになって、私たちをお救いになる。何をどうお救いになるのか、これを知らなくては、聖書の中のユダヤ人達が強盗を選び、救い主である主を磔にしてしまったように、仁愛という本当に大

切なものを見失い、目先の欲望を選ぶという同じ過ちが繰り返されます。

時空を超えて、永遠から存在されているお方が、この人間界への生誕によって、いかにして人類を救い、その前後で何が変化したのか、アドベントの季節、あるいは新年を迎える時にこれを学びましょう。

主のご誕生以前、その古代教会やヘブル教会には、主はどのように人に現れて交流なされたのでしょうか？ ビフォー・主の誕生の話です。

「古代の人々が神的な方を、人の形として、エホバをあがめたことは、アブラハムやその後のロト、同じようにヨシュア、ギデオン、マノアに人の形をして現れた天使たちによって明らかです。その天使たちはエホバと呼ばれ、すべてのものの神としてあがめられました。」(天界の秘義 6876-3)

「人間は、世から感覚を通してやってくる何らかの自然的なイメージと関係させなければ、自分の心の内に、抽象的な実体を形づくることはできません。なぜなら、そのようなイメージがなければ、いわば深淵の中に見失い、消滅してしまうからです。

それゆえ、肉体的・世間的な関心にどっぷり浸った人が、神的な概念を失わないように、またこの概念と同時に神的なものからくる天的・霊的なものすべてを、人間の不潔な思考によって冒流させないよう、エホバは、ご自身が本源的に存在することを教え、天界の内にご自身を、神的人間として明らかにすることを良しとされます。」(天界の秘義 5110-3)

「しかし、神的人間をまとった神性自体が、人間に影響を与えることができなくなった時、すなわち、人間があまりに離れてしまい、エホバが人間のもとに來られなくなった時、主の神的本質であるエホバは、降臨します。処女が神性を懐妊し、人間と同じように生まれることで、人間をまわれませす。しかし主は神的な方法によってその処女から受けたものを追ひ払い、その人間を神的なものになさいます。この神的なものにされた人間から、あらゆる神聖なものが発しています。このようにして神的人間は、本質としてそれ自体が天界のすべてを満たし、以前は救うことのできなかつた者を救済できるようになりました。」(天界の秘義 3061-3)

真のキリスト教の次の一文を考えてみましょう。

「永遠からの主、エホバが世に來られたのは、地獄を従属させ、ご自身の人間性を栄化させるためでした。この業なしにはあらゆる人間は救われることはありません。」(真のキリスト教 2)

主の降臨によって行われたのは、人間の遺伝悪を身にまとい、その悪に集まってくる様々な地獄の勢力、あらゆる魔の勢力を徹底的に破り、地獄にくびきをかけて支配下におき、世界の善悪のバランスを取り戻すことです。そうして、人間の善悪の選択の自由を回復させます。それ以前は悪が蔓延し、人間は悪に強く惹かれていたのです。

さらに、時間と空間を離れ、永遠と無限の世界で、創造とこれを維持するための不断の創造を続ける神的爱であるエホバのもとに戻り、魂と体が不可分であるように、エホバと主ご自身を結合しなければなり

ません。そうすることで、人が主の栄化の道筋をたどり、再生するよう路を示し、至るところに道標を置き、そして手をとって導いてくださいます。

真のキリスト教にはさらに一文が続きます。

「そして、救われる者は、主を信じる者です」(真のキリスト教2)

信じるためには知らなければなりません。知らないものは信じることができないからです。たとえ口先では信じると言っても、自然的にイメージできる形でなければ、消えてしまいます。

「人のもつあらゆる思考は、その感覚による経験の自然的なものうちに限られ、大海や宇宙を見つめても、何物にも焦点が定まらないように、その自然的なものに一致せず、そこから引き出せないものは、理解できず消えてしまいます。従って、もし教義的な事柄が、ほかの形で人に示されても、彼は全く受け入れず、そしてなんら敬意を払えません。」(天界の秘義 2553)

主がどなたであるか、どんな方なのか?そのため、旧約聖書の約束を実現した上で、さらに主ご自身が新約聖書の御言葉となりました。

私たちは御言葉を学ぶ時に、時と場所を超えて、主ご自身に会うことができます。その中で、私たちと同じように、親子、家族、兄弟、故郷、師弟それぞれの関係に囲まれ、愛情、憎しみ、嫉妬、尊敬、羨望のそれぞれに触れ、経験されたあとが、御言葉の内にかがわれます。詩編には、主が孤独の中で苦しみ、もがく姿、そして希望や喜びにあふれる姿が描かれています。詩編はダビデの歌い奏でた詩ではなく、主が地上で体験される感情が、あらかじめ啓示された神の御言葉です。

たとえ主のみ顔や、背丈の描写はなくとも、これが自然界の中での主のお姿です。降誕によって、預言の実現によって、まさに見える神となりました。

「わたしの手やわたしの足を見なさい。まさしくわたしです。わたしにさわって、よく見なさい。霊ならこんな肉や骨はありません。わたしは持っています。」(ルカ 24:39)

この肉や骨は私たちにも触ることができます。肉や骨、主の自然的人間としての感情、息吹が御言葉から伝わってきます。私たちが御言葉を開くたびに、無数の試練を全人類への愛によって克服し、勝利された姿を感じ、目にすることができるようになります。

「エホバである永遠からの主が世で人間の性質を身にまとう以前、主にある最初の二つの段階は実在していますが、第三の段階は潜在的なもので、それは天使達と同じです。主がこの世で人間の性質をまわられたあと、主はこの第三の段階の『自然的』と呼ばれるものをまとい、この世界の私たち同じような人間となりました。天使と私たちにあっては、この段階は有限で造られた物ですが、主のこの段階は、主の他の段階と同じように、無限であり、造られた物ではないという違いがあります。空間に縛られることなく、すべての空間を満たしていたはずの神性が、このとき、最も遠い自然の要素を貫いたのです。」(神の愛と知恵 233)

自然的なものは、天界と霊界の基礎となるものであり、遠く固いものです。これを貫き、最も遠いものま

で、神性が浸透されたのです。それまでは届かなかったものが、届くようになりました。

「エホバが、その民の打たれた傷をいやされる日には、月の光は、日の光のようになり、日の光は七倍となり、七つの日の光のようになる」(イザヤ 30:26)

主がこの世から天界にお戻りになったとき、実に太陽として霊界と天界にいらっしゃる主は以前に増して燦然と輝かれました。最古代教会や古代教会でも、幻のような見え方であったものが、はるかに明確に見えるようになります。これが、アフター・主の誕生です。

主が新約聖書以降で語られる御言葉に、アルファとオメガがあります。最初主はアルファであられ、かつ潜在的なオメガでいらっしゃいましたが、潜在的なオメガが顕在化します。

「わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」  
(黙 22:13)

「これは主が究極的なものを通して、最初のものからすべてを、すなわち天界のすべてを永遠に支配していることを意味します。・・・最初と究極にいる者は、中間的なもの、すなわちすべてを治めます。これらは主の神的人間について言われます、というのは、これらはイエス・キリストについて言われ、その名によって主の神的人間が意味されます」(黙示録解説41)

主の祈りの句、「御名が聖とされますように」は、イエス・キリストが神的人間であることを心から認めて、卑下することです。主は最初のアルファ、愛と知恵そのものであるとともに、同時に、最後のオメガ、自然的なものの中に存在されると宣言されておられます。私たちが知ることができる自然的なものに、常にいらっしゃいます。これほど力強く、強力な宣言はありません。

主は自らの肉体的生命を捨てて、これを実現されました。天地の唯一の神、全宇宙の創造者・維持者・支配者が、生命をかけて、私たちのために、自然的なものを神的なものになされたのです。主ご自身の言葉にもあります。

「人がその愛する者のためにいのちを捨てるといふ、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」(ヨハ 15:13)

世界・宇宙のすべてを支配されるお方が、私たち一人一人のために、命をおかけになります。これほど広く深い愛は、私たちの想像をはるかに超えるものです。

主は、さらにもう一度、別の形でこの世に降臨されます。天界の教えを書物の形として伝えられました。御言葉の本当の意味、純粋な真理を、書物を通して私たちに伝えることで、主がこの世でどのような生涯を送られたか、はじめて明確にわかるようになりました。これはある人物を選んで、すべてを用意し与え、時が来て霊界と自然界を同時に体験させ、聖書の内意を主、自らが説明する、という天地開闢以来の奇跡です。

この素晴らしい奇跡の効果は、どこまで及ぶのでしょうか？

「この世の王は、国全体のことだけをおおまかに考え、それぞれの大臣や官僚が個々の事柄を扱います。

しかし、神は違います。神は永遠からすべてをご覧になり、総てを永遠に備えられ、自らすべてをその秩序の内に保たれます。」(天界の秘義 8717-2)

主のお力は、原則や建前ではありません。実際に働く力です。主のみ力の及ぶ範囲も私たちの予想を遙かに超えています。

「主の予見と摂理は、あらゆる仔細で微細なことまでに存在し、その数百万分の一でさえ理解できないほど細部に至り・・・人生の、あらゆる瞬間のさらにその細部の一片にいたるまで、永遠に広がる因果の鎖につながれています。まことにその一つ一つが、後に続く新しい始まりであり、・・・瞬間・瞬間が新しい始まりです。」(天界の秘義 3854-3)

クリスマスは、年に一度のお祭りではありません。

歳をとって、体が不自由になっても、知性と意志を新たにし、主のみ力を受け入れ、主と共に歩む決心をし、歩み始めるなら、そのとき新たな人生が始まります。それは永遠に続いてゆきます。もちろんこれは死の恐怖や焦りから来るのではなく、情愛から、心から、そして合理的な思考で納得づくの上でなければ、始まりません。本当に悔い改め、自分を点検し、本当の自分を知った上で、新しい人生を主に祈り求めるなら、それはどんなときでも、新しい始まりです。そしてそれは主が私たちの中に誕生される本物のクリスマスでもあるのです。そのときこそ、イザヤ書に記された預言が実現します。

「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。」(イザヤ 9:6) アーメン

ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。(イザヤ 9:6)

「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。

光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。」(ヨハネ 1:1-5)

神である主、今いまし、昔いまし、後に来られる方、万物の支配者がこう言われる。「わたしはアルファであり、オメガである。」(黙 1:8)

### 真のキリスト教 109 (アルカナ訳)

主の到来 *adventus Domini* 以前の教会は、すべて表象の教会 *ecclesiae repraesentativa* で、神の真理も、陰のもとでしか、見ていない状態でした。ところが、主がこの世に来られ、主によって教会が創立されましたが、ここでは神の真理を見るだけでなく、光のもとで見ることができるようになりました。そのちがいは、夕方と朝のようです。主の到来以前の教会の状態は、〈みことば〉では「夕方」と言われ、主の到来後の教会の状態は、「朝」と言われます。

主は、この世に来られるまえ、教会に属する人にとっては現存されていましたが、ご自分を代表する天使たちをとおしての間接的現存でした。この世に来られてからは、教会に属する人にたいし、直接に現存されています。というのは、主はこの世にあって、神的自然性 *Divinum Naturale* も、身に帯びておられるからです。その神的自然性のうちにあつて、人々にたいし現存しておられます。

主の栄化とは、主がこの世でおとりになったご自分の人間性の栄化であつて、この栄化された主の人間性が神的自然性です。つまり主は、この世で身につけられた肉体の全部をともなつて、墓から復活されました。墓には何も残されませんでした。自然の人間性 *Humanum Naturale* は、最初から最後まで、ご自分にともなつて行かれました。だから、ご復活ののち、幽霊を見ていると思っていた弟子たちに、言われています。

「わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしなのだ。さわって見なさい。霊には肉や骨はないが、あなたがたが見るとおり、わたしにはある」(ルカ 24:37, 39) . . .

(3) 主がこの世に来られるまえの教会と、そのあとの教会とでは、月や星の光で、夜書物を読む人と、太陽の光で書物を読む人くらいに、その状態がちがいます。前者の場合、ただ青白い光だけで、視線がさまよふのにたいし、後者の場合は、燃えるような光ですから、誤ることがなく、はっきりしています。主については、次のように記されています、

「イスラエルの神は語られた、イスラエルの岩はわたしに言われた、『・・・朝の光のように、雲のない朝に、輝きでる太陽のようだ』と」(サムエル下 23:3, 4)

「イスラエルの神」とか「イスラエルの岩」とかは、主のことです。その他の箇所にもあります。「エホバが、その民の打たれた傷をいやされる日には、月の光は、日の光のようになり、日の光は七倍となり、七つの日の光のようになる」(イザヤ 30:26)。 . . . .

\*\*\*\*\*

説教の内容に疑問や納得できない部分、間違えている部分や改善すべき点があれば、ご指摘深く感謝い

たします。

またご連絡いただければ、教義・信仰に関する疑問や、洗礼・聖餐式・結婚式等に関する相談等、できる範囲でお応えいたします

〒065-0031 札幌市東区北 31 条東 16-3-12 サンクリエ N31-405

電話 [080-4433-4977](tel:080-4433-4977) (勤務中・礼拝中はとれない場合があります)

email; [shiro46m46@gmail.com](mailto:shiro46m46@gmail.com)